文学教材の指導についての研究

高木輝夫

一

本稿では、文学教材の指導において登場人物の心情を想像する活動を学習者にさせる場合、会話文で考えを書かせることが有効であることを主張する。

まず、文学教材の指導において登場人物の心情把握がどのように行われているか、その現状を見ておく。

東京書籍から出されている『新しい国語四上教師用指導書研究編』(1)、『新しい国語四下教師用指導書研究編』(2)、の二冊から四年の文学教材の「単元の目標」をすべて取り出してみると次のようになる。

○ 場面の様子や人物の気持ちの移り変わりが、聞き手によく伝わるように音読する。(古いしらかばの木)

○ 表現のすぐれているところを味わって読み、自分の作文に生かす。(たかの巣取り)

○ 場面の様子や人物の気持ちを想像しながら読む。(一つの花)

○ 人物の気持ちの変化を想像しながら読む。(ごんぎつね)

○ 場面や人物の気持ちを思いうかべながら読み、民話のおもしろさを味わう。(チワンのにしき)

○ 人物の行動や気持ちを想像しながら読み、物語を読む楽しさを味わう。(もうすぐ春です)

このように、全六単元のうち五単元の単元の目標に「気持ち」という語句が見られる。

教師用指導書は現在、全国の教師が授業の計画を立てるときに最も参考にしている文献だと考えられる。教師用指導書で、文学教材の指導において「気持ち」重視の単元の目標を示していることから、全国で行われる多くの授業もほぼこのような傾向にあると言ってよいだろう。

松野孝雄によれば、昭和五十一年の全部の国語の教科書の物語教材の手引きの六〇パーセントに「気持ちを問題とする発問」が載せられているという。そして、教科書の手引きが心情を多く問題として取り上げた結果、文学教材を扱った授業の多くが登場人物の心情を問うものになったと結論づけている。(3)

二

片岡徳雄は国語の授業について次のように言う。

姫路市のある小学校四年生の国語の授業――新見南吉の「ごんぎつね」を勉強していた。いたずら狐のごんを撃ち殺した兵十が、自分の思い違いを知り、思わず取り落とした火なわ銃。そこから苦渋と悔恨の「青いけむり」が立ち上る。作中のクライマックスに授業はさしかかっていた。

指導者は中年の女性教師である。指導計画案には、「ごん、お前だったのか、いつも、くりをくれたのは（句点なしママ）」という兵十の言葉を数人の子どもに言わせ、兵十の驚きを子どもたちそれぞれに体験させたい、とある。

（子どもたちは、さて、どのように読むのかな）私は固唾をのんで見ている。

「さあ、ここの、この言葉ね。誰か読んでくれる？兵十のきもちになって」

「……」

「あれ、誰も手が挙がらないの」

「……」

「横田くん」

「エッ、ぼく？」

「そう、読んでごらん」

「いや、いやよね」

「どうして？」

「恥ずかしいもの」

「エーッ、恥ずかしい？まあ……。じゃ、ほかの人は？」

「……」

すると先の横田少年は責任を感じたのか、くるっと後ろを向いた。

「みんなで、いっしょに言おう。セーノー」

兵十の、万感の思いがこもる先の言葉は、こうして、クラスみんなの斉唱で読まれた。

（セーノーか……。うーん残念。）

ところが、このクラスはけっして沈滞したクラスではなかった。その証拠に、気を取り直した先生が、「じゃあね、こう言った兵十の気持ちは、どうだったでしょう。その気持ちの言える人？」と問うや否や、子どもたちは堰を切ったように、挙手をし、元気よく次々に発言する。

「しまったと思います」

「悲しい気持ちだったでしょう」

「謝りたい気持ち」

「泣き出したかった」

「なんとも言えぬ気持ちだった」

見事な心理分析である。兵十の言葉を自分の音声では言えなかった子どもたちが、兵十の気持ちはこうだろうと解いてみせる。つまり子どもたちは「冷たく」分析して説明することはできても、「温かく」同化して自己表現することができない。なんという倒立だろう。

たしかに今、学校で行な（ママ）われている多くの文学教育は、文学で「楽しむ」ことを忘れている。文学作品の粗筋を読みとり、登場人物の心情や情景を読みとる。あるいは道徳や人間のあり方を考える――このような「読解主義」「心情主義」そして「道徳主義」が、作品に子どもたちの身も心も同化させることを抑え、文章表現の、面白さにひたることを忘れさせ、ひいては、子どもたちの多様で個性的な受けとりを画一的にしてしまう。これでは、文学で子どもの論理や分析の力は育っても、子どもの感性や想像や表現の力、さらには情操は育たないかもしれない。(4)

「姫路市のある小学校四年生の国語の授業」では確かに片岡の言うように「子どもの感性や想像や表現の力、さらには情操は育たない」だろう。しかし、「登場人物の心情や情景を読みとる」ことは決して「作品に子どもたちの身も心も同化させることを抑え、文章表現の、面白さにひたることを忘れさせ、ひいては、子どもたちの多様で個性的な受けとりを画一的にしてしまう」ことにはならない。片岡が、取り上げた事例が「子どもの情操を育てない」授業なのであって、すべての登場人物の心情を把握する授業がそうなのではない。「姫路市のある小学校四年生の国語の授業」は次の問題点を持つと考える。

「じゃあね、こう言った兵十の気持ちは、どうだったでしょう。その気持ちの言える人？」

という発問は登場人物の心情を読み取る上で有効か。

以下、この問題について検討する。

三

「〇〇の気持ちはどんなだったでしょう。」というのは、国語でよく行われる発問である。しかし、この発問に対する反応はおおよそ次のようであろう。

「うれしかった。」
「悲しかった。」
「くやしかった。」

これらは、片岡の言う「冷たい分析」の結果が反応と見ることができる。

一問多答の発問がよいとよく言われる。多様な反応を引き出すにはどうすればよいか。

「会話文で書きなさい。」

こう問うことによって学習者の中に具体的なイメージが

できあがる。例を示す。

東京書籍の四年「一つの花」でまず次の発問をする。特に指示はしない。

「ゆみ子をあやしているとき、お母さんはどんな気持ちだったでしょう。ノートに書きなさい。」

学習者は次のようにノートに書いた。

・お父さんに泣き顔を見せたくない気持ち。（同様一一名）
・こまった。（同様五名）
・無答（七名）
・会話文で答えた。（四名）

第二に、会話文で書くように指示して次のように発問した。

学習者は次のように書いた。

・帰りたいよ〜。
・やっぱりせんそうこわいよう。
・いきてかえれるかな。（三名）
・しにたくないな。
・せんそうなんてだれがつくったんだろう。しんだときせんそうをつくったやつをうらんでやる〜。
・ゆみは、おにぎりたべていいな。父は、なにもたべとらん。
・はやくせんそうからかえってくるぞ。
・ゆみ子が泣きやんでくれてよかった。
・さようなら（四名）
・ゆみ子、元気でいるんだぞ。（五名）
・ゆみ子、お父さんのことわすれるな。
・ゆみ子のためにいきてかえるぞ！（三名）
・おとうさん戦争に行くけどゆみ子は泣くな。
・ゆみこ……。
・お父さんがいなくてもがんばるんだぞ。（お父さんもせんそうでがんばるからな！（括弧内筆者）
・もう、ゆみ子や母にあえないだろう。（三名）
・これでいいんだ。（二名）
・三人でくらしたかった。
・せんそうに行くというのは死ににいくようなもんだ。（二名）
・ゆみこのせいちょうしたすがたが見たかった。（二名）
・二人にさよならをいっておけばよかった。
・ほんとうは行きたくない。
・りっぱに育つんだよ。

・お母さんをこまらせちゃだめだぞ。
・ゆみ子がよろこんでくれてよかった。
・大きくなったらどんな子になるんだろう。
・ほんとうは戦争なんかにいきたくなかった。
・りっぱにそだつんだよ。
・ゆみ子コスモスだいじにするんだよ。
・お母さんやゆみとはなれるのはさみしいけれどゆみがきゃきゃと喜んでくれたからよかった。（二名）
・ゆみ子があげたコスモスを大事にしてくれるといいなあ。（二名）
・お父さんはせんそうに行くけどゆみ子はどうなっているだろう。
・あー、なんてかなしいことだ。
・一輪のコスモスをわしだと思ってくれ。（二名）
・ゆみをたのんだ。
・ゆみ、ぜったい死ぬなよ。
・その他（二名）
・無答（二名）

指示なしの前者の発問と会話文で書くよう指示した後者の発問を比較すると、反応の多様さ、内容において大きな差が見られる。前者の発問では、ほぼ二種類の反応しか見られなかったのに対し、後者では、四〇種近くの反応が見られた。（類型化すれば一つにまとめられるものもあるが、今回は、学習者がノートに書いた通りのことばをそのまま掲載した。会話文で考えを書くことは学習者個々に具体的なイメージを喚起するのである。先行実践でも、特に低学年において、吹き出しなどを利用して登場人物の心情を会話文を書くことを通して想像する活動を学習者にさせるものが多数見られる。本稿では、登場人物の心情を学習者に想像させる際に、会話文で書くことが有効であることを会話文で書かせない場合と比較して、これを検討した。

注

（1）新しい国語編集委員会・東京書籍株式会社編集部編『新しい国語四上教師用指導書研究編』東京書籍、一九九二。
（2）新しい国語編集委員会・東京書籍株式会社編集部編『新しい国語四下教師用指導書研究編』東京書籍、一九九二。
（3）松野孝雄「『気持ち』を問う手引きから脱却しよう」『教育科学国語教育』四六四号、明治図書、平成四（一九九二）年九月、一〇五～一〇九ページ。
（4）片岡徳雄『子どもの感性を育む』日本放送出版協会、一九九〇、五六～五八ページ。

（古河第五小学校）